

博士論文要旨

論文題名:カナダにおける日本人水産移民の歴史地理学研究

カワハラ ノリフミ
河原典史

本書の研究目的は、歴史地理学のアプローチを重視し、時間と空間からカナダ日本人水産移民史を明らかにすることである。研究対象期間は、1800年代末期から太平洋戦争勃発までの約50年とする。空間スケールについては、出身地と移住地について相互に考える。集落、さらに家族や個人レベルでも検討する。そして、陸上の居住空間と海上の漁場空間とを相互補完的に考察する。つまり、日本での出身地を基盤とする社会・経済的な分業システムや、他民族とのかかわりにおける居住空間の特徴的な利用について考察する。具体的には筆者は、サケ缶詰産業における日本人世業者の役割について他民族との分業体制を明らかにする。日本人漁業者がバンクーバー島西岸への移住や、日本人造船業者の活動について研究する。さらに、日本人漁業者の独占的な産業となった塩ニシン製造業や、鯨油を採取する捕鯨業に関わった日本人漁業者も検討する。

分析にあたっては、日本人住所氏名録や、外務省外交史料館、農商務省や大日本水産会による報告書を活用した。とくに大縮尺図とその解説を記した『BC州サケ缶詰工場図集成』は、居住空間の考察に有益である。その他、帳簿や小切手など、文書館の所蔵資料を活用した。さらに、古写真や日記を併用し、日本人のライフヒストリーを描いた。そのときの聞き取り調査は、重要である

1920年代のカナダには、約80ヶ所のサケ缶詰工場が操業されていた。経営者であるイギリス系のもと、ファースト・ネーション（インディアン）だけでなく、多くの中国人が缶詰製造、日本人移民はその材料となるサケ類の漁獲に従事していた。日本人は全体の60%の工場で雇用されていた。そこでは、ファースト・ネーションの居住施設は小屋、中国人は寝台舎、そして、日本人は簡易住居が提供された。その他、網小屋や網干場のほか、日本人の居住区には、漁船や運搬船の新造・修理を担う造船所が設けられることもあった。東京移民合資会社による契約移民の多くは、鉄道保線工として渡加した。契約期間を終えると彼らは、先に和歌山県出身者が自由移民として活躍していたサケ缶詰産業に転じることが多かった。鹿児島県出身者をはじめとする彼らの居住地は、スティーブストンではなく、遠方のキャナリーで雇用された。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、カナダ北西岸の各地にいくつかの捕鯨基地が開設された。捕鯨船船長と機関長はイギリス人、砲手と水夫はノルウェー人が務めていた。捕鯨基地では約80名が働き、おもにイギリス人は技師長、書記、採油・肥料主任などの事務を任っていた。それに対し、日本人は同胞者を取りまとめる主任のもとで、皮・肉切りなどの雑役、中国人は鯨油の採集に就いていた。捕鯨基地の施設配置をみると、解体場を中心に、事務所の他、日本人と中国人とに分かれた住居が建ち並んでいた。この分業システムと居住空間の配置は、

サケ缶詰産業と類似する。

1900年当初、バンクーバー島東岸に約40カ所の塩ニシン工場が建設された。大規模な漁具・漁業施設が必要なこの産業では、都市出身者が流通・貿易をし、和歌山県の漁村出身者が漁撈を担っていた。ナナイモ湾岸では、塩ニシン製造業は秋から春にかけての季節的な労働であり、日本人の住宅は、出稼小屋として利用されていた。ニシン漁業に関わる漁船は、ニシン群を漁獲する2隻の網船のほか、曳船やスカウから構成されていた。曳船には船長と機関長のほか、和歌山県出身の船頭が乗船し、ニシン群を発見した。魚群を取り囲んだ後、スカウに移った漁業者はたも網を利用してニシンを掬い入れた。この作業には、日本人だけではなく、ユーゴスラビア系移民も関わっていた。第一次大戦で荒廃した北大西洋に代わって、日本人の独占的な産業となった同業は、厳しい排斥をうけた。そのなかで、塩ニシンは日本を経由して香港や上海へ輸出されていた。それに対し、ピクルスはヨーロッパ、燻製はカリブ海へ輸出されていた。

1913年、カナダ太平洋鉄道の工事によってサーモンの遡上量が異常をきたした。また1918年に、スティープストーンでは、大きな火災が起った。一方、スティープストーンでは漁船の動力化が始まった。そのようななか、日本人漁業者がバンクーバー島西岸の沖合に大きな漁場を発見した。それによって、スティープストーンからユクルーレット、トフィーノとバムフィールドなどバンクーバー島西岸に移住する者が続出した。和歌山県出身の前川勘三は、ユクルーレットに1924年に日系漁業組合を組織した。そこでは、清水湾のように日本人は出身地毎に居住者の名前が付された居住地が形成された。また、出身地による分業システムによって日系漁業組合の船長、機関長や経理、そして日本語学校などが運営されていた。

1910年代以降、カナダ西岸の日系漁民に漁船の動力化に関する特需が生じた。それ以前の無動力船時代では、家大工経験者が応じてきた漁船の修理が、動力船になると対処できなかった。そのとき、伝統的な造船業地域で生誕し、高次な技術を修得していた日系船大工が活躍したのである。その中心となったのは、多数の日系漁民を輩出した和歌山県のなかでも、日置や新宮などの南東部の人々であった。

サケ缶詰産業と捕鯨業では、ファースト・ネーション、イギリス系・ノルウェー系、中国人などと日本人の棲み分けがなされていた。ただしそれは、必ずしも全てが排斥によるものではなかった。それは、産業の発展にともなう合理的な空間配置であった。やがて、カナダ資本から脱した日本人は塩ニシン製造業へも展開した。さらに、バンクーバー島西岸の漁村開拓も開拓した。日本人集住地では地縁・血縁関係から棲み分けが生じていた。このように時間と空間をとらえる歴史地理学からのアプローチから、新たな日本人水産移民史が明らかになった。この視点は、アジア人の移動にともなうカナダ開拓史の再検討にも通じるのである。

今後の課題として、契約移民として20世紀初頭に渡加した日本人の水産業への転業を考える。さらに、1920年代の漁業ライセンスの削減によって、漁業からガーディナー (gardener) への転業も検討しなければならない。戦後における他産業への展開も含めて、カナダにおける日本人水産移民史を総合的に理解することが必要である。